授業科目	言語発達障害Ⅲ（評価法－基礎）				
担 当 者	大谷多加志・工藤芳幸・赤壁省吾				（オムニバス）
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学　　年	1年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択･必修	必修

■ 授業目的・内容

・対象者の発達状態を適切に理解することは、小児の言語治療を行う上で非常に重要なことである。本講では小児の発達評価に最もよく用いられる検査のひとつである新版Ｋ式発達検査2020の実施・評価を学習することを通して、小児の発達アセスメントにおける基礎的理解を深めていく（大谷)。
・LC スケール（言語･コミュニケーション発達スケール）を取り挙げ、言語理解･言語表出･コミュニケーションの発達アセスメントの方法を学ぶ。また、検査結果を統合・解釈し、指導目標を設定するプロセスを習得する（工藤)。
・前半部分では、言語の発達に不安を感じる親子が訪れた際、言語聴覚士がどのように保護者を迎え、支援を始めるかについて紹介します。発達障害や知的障害がある子どもの特性理解の学びを通して、直接的な個別支援、または集団場面での社会性を重視した関わり方など、年齢や目的に応じて言語聴覚士の役割は大きく変わります。後半部分では、放課後等デイサービスや就労支援サービスなど、長期的な視点での支援の必要性に焦点を当てます。学齢期以降の介入は、読み書きや計算などの学習面への支援や、自己認知を促す特性理解の支援が重要です。これらは自立への道のりとして、就労に向けたプロセス理解に繋がります。さまざまな支援方法についての理解を深め、コミュニケーション上の課題を切り口にして、より深い理解を目指します。(赤壁)。

■ 到 達 目 標

・小児の発達アセスメントに関する基礎知識を身につける
・新版Ｋ式発達検査2020の概要と幼児期の検査項目の実施・評価の方法を理解する（大谷)。
・小児の言語･コミュニケーション発達に関する評価法および指導目標設定についての基礎知識の習得（工藤)。
・発達障害の特性やライフステージにおける変化を理解する。(赤壁)
・地域支援のあり方について知識を深める。(赤壁)
・障害福祉の障害児通所支援サービス・就労サービスを理解し説明できるようになる。(赤壁)

■ 授 業 計 画

第１回　発達アセスメントの意義と留意点　（大谷)
第２回　新版Ｋ式発達検査2020の概要　（大谷)
第３回　検査の実施手順と評価　乳児　（大谷)
第４回　検査の実施手順と評価　乳児～幼児　（大谷)
第５回　検査の実施手順と評価　幼児①　（大谷)
第６回　検査の実施手順と評価　幼児②　（大谷)
第７回　検査の得点化、発達年齢・発達指数の算出（大谷)
第８回　検査結果にもとづく発達評価と助言、支援　（大谷)
第９回　事例から考える発達評価・発達支援　（大谷)
第10回　LC スケール（ 言語・コミュニケーション発達スケール）の概要　（工藤)
第11回　LC スケールの実施手順と評価①　言語表出・言語理解領域　（工藤)
第12回　LC スケールの実施手順と評価②　コミュニケーション領域　（工藤)
第13回　検査結果の統合と解釈および指導目標設定②　（工藤)
第14回　発達障害の特性理解と関わりについて（赤壁)
第15回　障害福祉サービスでの言語聴覚士の働きについて（赤壁)

■ 評価方法

大谷担当、工藤担当、赤壁担当を合わせて100％で評価する。
・第１回～９回、大谷担当分は、授業後のショートレポートによって評価する。
・第10～ 13回、工藤担当分は、講義時間内に実施する提出課題により評価する。
・第14・15回、赤壁担当分は授業後のレポートにて評価をする。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

必要に応じて講義中に指示をする。

■ 教　科　書

書　名：標準言語聴覚障害学　言語発達障害　第３版
著者名：藤田郁代　監修
出版社：医学書院

■ 参考図書

書　名：言語・コミュニケーション発達の理解と支援 :LC スケールを活用したアプローチ
著者名：大伴潔、林安紀子、橋本創一
出版社：学苑社

書　名：新版 K 式発達検査2020実施手引書
出版社：京都国際社会福祉センター

書　名：小児リハビリテーション　vol.14（特集）コミュニケーションの発達②　１歳からの言語の発達
著者名：学齢期の社会性とコミュニケーション言語の発達　赤壁省吾　分担
出版社：ともあ編集部

■ 留意事項

不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する場合がある。変更が生じた場合は、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。